

建設就職読本

建設業を志す君たちへ



建設業 就活応援サイト



最近の若者だけでなく、
建設業界に
就職したら
毎日が予想外に
充実している
件。

建設業の魅力
未来をつくるワクワクがある

建設業の働き方改革
イクボス&イクメンインタビュー

先端技術を活用
i-Constructionで変わる
建設業の未来

未来を築き、社会を支える
ゼネコン若手社員インタビュー

建設業界若者の声
Freshers Voice

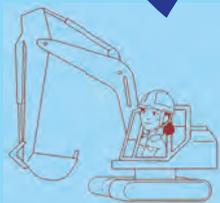
現場密着ルポルタージュ
現場を支える若手社員の日

安全で、豊かな暮らしづくり
ビッグプロジェクト

チームワークが大切！
建設業、お仕事相関図

建設業界社員
キャリアパス

今昔竣工物件紹介
Legacy



建設業の魅力

都市という大きなキャンパスに、どんな未来を描こう。建設業界で働く若者たちは、目の前にある現場の向こうに、それぞれの理想を思い描いている。オフィスや工場で働く人々。笑顔で走り回る子ども。それを穏やかに見守るお年寄り・・・誰もが安心して暮らせる街を実現するために、若者たちは日々、創意工夫を重ねている。そこには、仲間と分かち合える感動がある。努力がカタチになる喜びや、理想を実現する醍醐味がある。そして、自分たちの仕事が、多くの人々の暮らしを支えているという確かな実感がある。

ワクワク未来をつくる ワクワクがある

TEAMWORK

チームワーク

一人ではできない大きな仕事

都市を創造するというスケールの大きな仕事は、決して一人の力ではなし得ない。さまざまな専門分野の技術・技能をもつ多くのスタッフと、インフラや建物を完成させるという同じ目標や信念のもとに力を合わせる。その経験は、多くの発見と学び、そして感動に満ちている。

MOTIVATION

やりがい

自分の努力がカタチになる

建設業のやりがいとして誰もが口にするのが、自らが手掛けた建造物がカタチとして残る喜びだ。竣工した際の感動はもちろん、お客様からのねぎらいの言葉、街の一部として人々の役に立っている実感...それらすべてが、自身の誇りになる。

CREATION

創造

理想を自らの手で現実に

脳裏に描いた理想の建物を、自らの手でカタチにしていく。そこにはモノづくりの醍醐味がある。建設業で手掛けるモノづくりは、建物、そして都市という、大スケールならではの難しさがあるが、だからこそ、創り上げたときの喜びも大きい。

SOCIAL CONTRIBUTION

社会貢献

誰かの幸せのために働く喜び

地震や台風、水害などの災害が頻発するなか、安全・安心な社会への要求が高まっている。災害に強い建物づくり、街づくりに努める一方で、万が一際しては、最前線で復旧・復興に尽力する。それが建設業にとっての大きな社会的使命である。

建設業の働き方改革

近年、幅広い産業分野で取り組まれている「働き方改革」が、建設業においても着々と進行中です。誰もが夢をもってイキイキと働ける——そんな職場づくりに向けた、建設業界の取り組みの一例を紹介しましょう。

政府の後押しのもと、建設業の働き方改革が加速



かつて建設業といえば“3K(きつい、危険、汚い)”という印象から、就職先として敬遠されがちな面がありました。近年では、建設業においても「働き方改革」が進んでおり、“新3K(給料、休日、希望)”をスローガンに掲げ、建設業で働く人々に、安定した給料と休日を保障することで、希望の持てる職場にしようとする取り組みが活発化しています。

建設業の担い手は、社会のインフラを支える不可欠な存在であり、建設業を若者にとって魅力のある職場にすることは社会全体の課題です。そこで、2018年3月に国土交通省が「建設業働き方改革加速化プログラム」を発表。長時間労働の是正や給料・社会保険の充実、生産性の向上の実現に向けて、官民一体となってさまざまな取り組みを進めています。

各社の取り組み

性別を問わず、誰もが安心して健康に働ける職場づくりに向けた、建設業各社の取り組み事例を紹介しましょう。

出産・育児休暇



結婚や出産は、女性が仕事を続けていく上で大きな岐路となります。建設業各社では、女性の活躍を促進するため、出産・育児休暇制度の充実に努めるとともに、職場に復帰しやすい環境づくりを進めています。

イクメン支援



「イクメン」とは子育てに積極的に関わる男性を指す言葉。男性社員にも育児休暇取得制度を設けるとともに、その制度を活用しやすいよう、部下の動きやすい環境を整え育児参加を後押しする「イクボス」の育成・啓発に努めています。

ワーク・ライフ・バランス



週休2日制の定着や長時間の残業防止など、労働時間の短縮に向けた仕組みづくりが進んでいます。仕事を効率化し、休暇や余暇を充実させ、家庭や自己啓発、健康増進などの時間を持つことで、プライベートと仕事の調和を目指しています。

仕事と家庭は、どちらもなくてはならないもの

近年、よく「仕事と家庭の両立」ということが議論されていますが、私自身への反省も含めて言えば、「仕事」と「家庭」は別個に存在するものではないと思っています。人は家庭があるからこそ仕事を頑張ることができる——そう思えば、仕事に熱中するあまり家庭を犠牲にすることを“美談”にするのではなく、むしろ家庭を大切にすることを理想とするような意識改革が必要だと思っています。そのため、私は部下と接する際、できるだけ家族を話題にし、例えば

子どもが生まれたばかりの社員には早めの帰宅を促すなど、職場でのサポートを必要としないか把握するよう努めています。同時に、和佐君のように、与えられた休暇制度をしっかり活用して、家族を大切にしている先輩たちの例を紹介することで、制度を利用しやすい風土づくりを心がけています。建物や街は、いわば建設業で働く人々の“想い”の結晶です。家族を大切に“想い”が集まることで、誰もが明るく幸福に暮らせる建物や街ができるはず。そう私は信じています。

林賢吾
建築工事部 工事長
1992年入社

ここでは、実際に仕事と育児を両立しているイクメンや、その後押しをするイクボスから、建設業における働き方改革の実態について聞いてみました。



イクメン

和佐智史
建築工事部 作業所長
2003年入社

まずは職場に相談して周囲の理解と協力を得ることが大切

妻が双子を授かったことが分かったとき、子宝に恵まれた喜びとともに、母体への負担の重さが心配になり、「出産の際には必ず妻の側にしよう」と誓いました。作業所長という立場上、休みを取ることの影響も大きいので、躊躇もありました。しかし、上司の林さんに相談したところ、まず「おめでとう！」と我がことのように喜んでいただけ「君が率先して休みを取れば、後輩たちも休みやすくなる」と励まされました。その言葉に後押しされ、出産予定日に有休と合わせて5日間の休みを取ることを宣言したところ、周囲から「気にせず

どんどん休んでください」と言ってもらえ、よい仲間にも恵まれたことに感激しました。無事に出産した後も、週に数日は早めに帰宅するよう心がけていますが、そのため、従来以上に仕事の段取りに気を配るようになり、かえって効率が上がったように感じています。これから結婚・出産を控えて、職場への影響を考慮している皆さんには、自分だけで思い悩むのではなく、まずは職場で実際に口にしてみることをオススメします。そうすれば必ず、周囲は祝福し、協力してくれるはずですよ。

i-Constructionで 変わる建設業の未来

近年、国土交通省が推進する「i-Construction」とは、建設現場にICT（情報通信技術）を導入することで、現場作業の効率や質、安全性などを飛躍的に高めるもの。その先端技術を紹介します。

メリット

- 1 効率向上による労働時間の短縮
- 2 無人化などによる安全性の向上
- 3 技術革新による施工品質の向上
- 4 経営効率の改善による賃金向上



建設機器の遠隔操作による無人化施工

ドローンの活用による3次元測量

AR（拡張現実）を利用した高精度な設計

情報端末を駆使した内部構造の把握

遠隔地から現場を把握する「テレワーク」

活用事例

災害対策工事の「無人化施工」

地震や台風、火山の噴火など、自然災害にともなう復旧工事には、二次災害の危険が付きもの。こうした現場で威力を発揮するのが「無人化施工」だ。無人化施工とは、無線通信技術などのICTを活用することで、安全な場所から災害現場の状況を把握。建設機械を遠隔操作して、危険な現場に足を踏み入れることなく迅速・確実な施工を行うものだ。

例えば、2016年の熊本地震では、土砂崩れの拡大を防ぐための斜面崩壊緊急対策工事において、「ネットワーク対応型無人化施工システム」が採用された。

この現場では、余震によるさらなる崩落が危惧さ

れていたが、対策を要する範囲は広大であり、かつ、短時間での施工が求められた。そこで、同システムの導入により、「通信用」「映像用」「操作用」の各情報をそれぞれデジタル化して混線を防ぎ、斜面崩壊の現場から約1キロ離れた操作室で一元管理する仕組みを構築。各地の現場を映像で把握しながら、多数の建設機器の同時稼働を可能にした。

これにより、安全で確実な対策工事が実現し、早期の復旧に大いに貢献する結果となった。自然災害が多発している近年において、無人化施工技術の発展は重要になりつつある。



遠隔操作により無人で稼働する建設機器



広範囲におよぶ対策工事の現場 現場から1キロ離れた操作室

活用事例

情報端末を駆使した業務効率の改善

建設現場では、図面など多くの書類が必要とされるが、紙でできた書類は作成・管理には多大な業務負担をともない、業務効率を改善する上で大きな課題となっていた。近年、こうした課題の解決策として注目を集めているのが、現場に携帯できるタブレット端末に、さまざまな情報管理システムを導入し、業務効率改善を図る試みだ。

例えば、これまでは現場でチェックを行い、事務所に帰ってからパソコンで書類をまとめ、関係者と共有するという作業だったが、タブレット端末を使ってその場で電子書類を完成させることが可能になり、二度手間になっていた煩雑な作業を省力化することができた。また、タブレット端

末同士に同じアプリを入れておけば、それらの電子書類データは現場から離れた関係者ともSNSのような要領で簡単に共有することができる。

他にも、タブレット端末のカメラ機能を活用することで、作業員と施工管理者が遠く離れた場所にもリアルタイムに現場の状況を確認し、スムーズに作業の指示を出すことが可能となるなど、機能や精度の向上とともに、昔では考えられなかった新たな働き方が実現。

タブレットやスマホなどの情報端末を活用したICT技術の導入は、建設現場における時間の有効活用の一助となっている。



情報端末を用いて現場で書類作成



必要な図面をその場で検索 事務所に戻っての事務処理は不要



天 下井 哲生
2009年入社

若手こそが「i-Construction」の担い手

近年、建設業界において大きなトレンドとなっているのが、ICTの活用による業務の効率化です。例えば、無人で動くICT建機やドローンなどを導入することで、現場の生産性は飛躍的に向上しますし、安全性も高まります。また、現場に情報端末などを導入して、リアルタイムな情報共有を可能にすることで、施工全体の効率化も進むはず。こうしたICT活用を社内にも普及・推進していくのが私の仕事であり、具体的にはドローンによる測量データを用いた3次元モデルの作成など、現場への情報化施工の

導入支援を行っています。建設業界は、まだICTの導入が始まったばかりで、他の産業分野に比べると、やや遅れていると感じています。逆に言えば、普段からスマホなどを使い慣れた若い世代にとっては、活躍の機会が大きく広がっているとも言えるでしょう。今後、建設業の担い手不足が懸念されるなか、ICTを駆使して現場の生産性向上につながるシステムを開発していくとともに、私も含めて「i-Construction」の担い手となる人材を育てるための体制づくりにも取り組んでいきたいと思っています。

ゼネコン若手社員

インタビュ

未来を築き、社会を支える

建設業には多種多様な職種の仕事があります。

現在、建設現場と深く関わる立場で活躍している若者たちに、

それぞれの現場で取材しました。これからの建設業界を支えるモノづくりへの

情熱とエネルギーをご紹介します。



ICTを駆使して“段取り力”をアップ

建設現場では“段取り9割”と言われるように、事前の準備がとても大切です。明日の現場では、何名の作業員さんが、どんな作業を行うのか。どれくらいの資材が必要か……。日々の業務内容を確認して、必要な準備を手配するのが施工管理の仕事。万一、手配漏れがあれば、工期に遅れが生じかねないうえに、作業員さんにも迷惑をかけてしまいます。そうした責任の重さを感じつつ、日々の仕事に当たっています。“段取り”を漏れなく、確実に行うには、いかに仕事を効率よく行うかが問われます。そこで強い

味方になっているのがICTです。私たちに支給されているタブレット端末は、各種の図面や書類を現場で検索・閲覧できる優れモノ。事務所に戻って書類を確認するといった手間を省けるだけでなく、その場で帳票に入力し、データとして保存できるので、書類作成の手間も大幅に削減できます。かつてはすべて手作業で行っていたことが、今ではICTによって効率化されているので、この恵まれた環境を活かして“段取り力”を高め、現場全体の効率化に貢献していきたいと思っています。



北 山 敦子
2017年入社

女性ならではの気配りを活かして



小 泉 奈々美
2018年入社

もともと建設業界を志望していたわけではなく、保育士になりたいと思っていました(笑)。両親から「将来に備えて手に職をつけなさい」と勧められ、工業高校から専門学校に進学。実習でイスを作ったり、測量したりするなかでモノづくりの楽しさを知り、将来の仕事としてイメージするようになりました。いざ就職するにあたっては、建設業に対して“男性中心の職場”といったイメージもあり、正直なところ不安もありました。それでも「好きな仕事をやりたい!」という気持ちで飛び込んでみると、上司や先輩はもちろ

ん、協力会社の人も優しい方ばかりで、何でも話せる雰囲気でした。男性中心の職場なので、「女性らしい気配りがあって助かるよ」と言ってもらえることもあります。だからといって甘えは許されません。自分のミスで周囲に迷惑をかけてしまったときは厳しく叱責され、施工管理という仕事の難しさや責任を痛感しました。まずは目の前の仕事を1つひとつしっかりとこなし、少しずつでも周囲から信頼されるような存在になっていきたいですね。

スケールの大きなモノづくりの醍醐味を実感

「せっかく仕事にするのなら、スケールの大きなモノづくりを」と建設業界を選びましたが、実際に働いてみて、モノづくりには2つの喜びがあることに気付きました。1つは、子どもの頃から感じていた、自分で手を動かす喜び。そしてもう1つが、多くの関係者と協力して、より大きなモノをカタチにしていく喜びです。これこそ、私が担当している施工管理という仕事の喜びに他なりません。自分の手配したコンクリートなどの資材が、自分の依頼した協力会社の手で、整備された護岸へ

と仕上がっていく——その姿を目の当たりにすることができるのが、この仕事ならではの醍醐味です。一方で、こうした大スケールのモノづくりも関係者の緊密な連携が欠かせません。1つの伝達ミスが、多くの関係者に影響を与えかねないという厳しさを、常に意識して取り組んでいます。幸い、これまで経験してきた職場は風通しも良く、社員も協力会社の人も、相談しやすい方ばかり。周囲への感謝の気持ちを忘れず、日々、きめ細かな情報共有を通じて、自身もさまざまな知識を吸収していきたいと思っています。



有 賀 隆造
2016年入社

経験とともに知識と視野が広がる



山 下 瑠梨
2016年入社

建設業界を志望したきっかけは、古い家がリニューアルで甦る有名テレビ番組を見て「面白そう」と思ったこと。大学では建築学科を選びましたが、就職活動の際には、戸建て住宅を手掛けるハウスメーカーよりも、多種多様な建設物に関われるゼネコンを志望しました。実際に入社して感じたのは「こんなにやることが多い!」というもの。一口に建設業といっても、業務領域は非常に幅広く、それぞれに異なる技術や知識が求められます。とくに、施工管理という仕事は範囲が広く、スケジュール管理から資材管

理、安全管理、予算管理と、建設現場におけるありとあらゆることを管理・監督することが求められます。よく「最初の10年は修業」と言われます。実際、私も入社一年目は、学ぶべきこと、覚えなければならないことが非常に多いため、目の前の仕事をこなすだけで精一杯でした。最近、少しずつですが、現場全体を俯瞰して捉え、次に何が必要かを考えられるようになってきました。目標とする上司や先輩にはまだまだ及びませんが、今後もさまざまな現場を経験して、より広い視野を身につけていきたいです。

建設現場というものは、日々、変化を続けており、建物が少しずつ完成に近づいていくのを実感できます。皆さんも建物ができる瞬間を体験しませんか？



完成した建物が何十年も形として残っていく—そんな実感を大切にしながら、その建物を長年、使うことになる方々を喜ばせられるような仕事をしたい。



「何のために働くのか？」と考えているあなた！建設業界なら、その答えが見つかるはず。夢や情熱を持った仲間たちと一緒に、ロマンを追い求めてみませんか？

現場監督として周囲から信頼されるには、現場で起こるさまざまな事態に対処できなければなりません。自分にできることを増やし、1日も早く一人前の現場監督になります！



工事を無事に終わらせるうえで、私たち事務の仕事も非常に重要です。これからも仕事はもちろん、新婚生活も頑張っていきます！



建物には1つひとつ異なる個性があるので、規模を問わず幅広い建物を設計することで、自身のスキルと経験値を高めていきたいですね。

まだ研修中ですが、施工実習で同期の仲間とともにモックアップを竣工できた喜びは格別！研修後に配属される現場では、もっと大きな感動が待っているはず！



建設業界若者の声

Freshers Voice

建設業界で働く若者たちは、日々、何を想い、何を目標に、どんなやりがいを持って働いているのだろうか？実際に現場で活躍中の若手社員たちに、仕事に対する率直な想いを語ってもらった。



現場事務という仕事は、建設現場における資金管理や労務管理など多岐にわたります。多種多様な経験ができるので、充実した日々を送っています。



自分の仕事がカタチになっていく様子が間近で見られるので、日々、達成感が得られます。どんな状況にも対応できるよう、いろんな経験を積んでいきたいです。



現在のテーマは「生産性の向上」。各部署の業務を効率化する一方で、効率を追うあまりに仕事の本質を見失わないか、常に振り返るよう心がけています。



さまざまな想いやアイデアを図面にし、たくさんの人達と協働して魅力的な建物をつくりあげていく。そこに設計という仕事の楽しさがあります！



これからの建設業に求められるのは、「先端技術を駆使した効率化」と「守るべき職人技」を融合させ、「次世代の担い手」を育てていくことだと思っています。



建設業界に入ってよかったと思うのは、頼りになる上司や先輩が多いこと。仕事での悩みはもちろん、プライベートも含めて、気さくに相談に乗ってもらっています。



好奇心を忘れることなく、周囲とのコミュニケーションを大切にしながら日々の仕事に取り組むことで、ものづくりの楽しさが実感できるはず！

若手社員の日

建設現場の状況は、案件ごとに千差万別なうえに、同じ現場でも常に変化し続けるもの。それだけに、日々の積み重ねが重要です。建築、土木の現場に関わる若者の一日を実感してください。

土木施工管理 / 2016年入社

杉山 弘晃さんの一日

8:00



朝礼

現場スタッフ全員を集めての朝礼。2週間に一度回ってくる司会のときは、やはり緊張します。

9:00



現場巡回

現場で気になったことは積極的に指摘し、協力会社の方々と課題意識を共有するよう努めています。

10:00



デスクワーク

社内打ち合わせに向けて資料のまとめや作成、メールの返信等を行います。

11:00



社内会議

各工区の進捗状況や課題について情報共有。上司や先輩の発言からさまざまな気付きが得られます。

12:00



昼食

近くのファミレスに行ったり、事務所で弁当を食べたり。コミュニケーションを深めるための大切な時間。

14:00



施工計画作成

実は、仕事の半分はデスクワーク。事前にどれだけ綿密に準備できるかが重要です。

15:00



現場巡回

毎日の安全点検をおろそかにしないことが、施工管理の基本中の基本です。

17:15



夜勤への引き継ぎ・退社

一日の終わりに、当日の進捗と、明日の予定を確認。その後はみんなで繰り出すことも。



ともに働く仲間との
一体感が大切!

周囲から頼りにされるような “人間性”を磨いていきたい。

今でも忘れられない言葉が、入社1年目に言われた「仲間を大切にしろ!」。同じ現場に配属された同期が、ミスを挽回しようと遅くまで頑張っているのを、ただ見ているしかできなかった私に、先輩が投げかけた言葉です。この仕事では、知識や経験はもちろん、それ以上に問われるのが、ともに働く仲間を思いやる人間性。苦勞を分かち合い、ともに汗をかいてこそ、確かな信頼関係が築かれ、一人ではできない大規模なモノづくりができるのです。以来、私はそれまで以上に周囲とのコミュニケーションを大切にしています。やがて自分にも後輩ができたとき、かつての先輩のように頼られる存在になりたい。それが今の目標です。

現場で汗をかくだけでなく そのための準備も大切

高専で建築を学んだ私は、「第32回オリンピック競技大会(2020/東京)」と「東京2020パラリンピック競技大会」を間近で体感したくて、東京で働けるゼネコンを選びました。現在の職場でもオリンピックに向けた活気を感じることができ、自分も微力ながら、その一端を担っているという実感があります。土木監督だった父を通じて、ある程度は仕事内容をイメージできていたつもりでしたが、実際に働いてみると、思っていた以上にデスクワークが多いことに驚かされました。どちらかといえば事務仕事は苦手な私ですが、事前の綿密な計画や手配があってこそ、現場が円滑に進むのだということを痛感する毎日です。

綿密な計画や手配で
現場の効率を向上!



建築施工管理 / 2016年入社

野崎 優さんの一日

8:00



朝礼

毎朝の朝礼で、当日の予定や注意点を確認。一日のスタートです!

9:00



現場巡回

現場の安全確認も大切な仕事。女性ならではの細かい気配りで、危険のタネを察知します。

11:00



社員打合せ

若手といえども、自分の意見をしっかりとって、積極的に発言することが大切です。

12:00



昼食

一息つける大切な時間。お弁当を作ってきたところだけど、ほとんどは近所のコンビニで。

13:00



昼礼

午後の作業内容の確認を行い、職人さんと危険なポイントを確認。気を引き締めて午後もしっかり頑張ります。

14:00



現場巡回

配筋と図面を見比べてズレがないかチェックします。

15:00



計画・検討業務

現在着工している工事を含め、今後の工事内容を確認し、現場での段取りや必要な資材を確認。準備の綿密さが、現場の効率を左右します。

18:00



退社

明日に備えて退社。ときには先輩方や現場の皆さんと飲みに行くことも。

ビッグプロジェクト

安全で、豊かな暮らしづくり

都心部にあるビルは、現在のような耐震基準が定められる以前に建てられたものも多く、老朽化とともに防災面での懸念も高まっています。これらのビルを街単位で“スクラップ&ビルド”し、再開発する動きが、都内をはじめ全国各地で進んでいます。また、近年、大規模な自然災害が頻発しており、防災・減災を目的とした大規模な土木工事も行われています。ここでは東京で進んでいるビッグプロジェクトの数々を紹介しましょう。

東京駅前常盤橋プロジェクト

東京駅日本橋口前で、敷地面積3.1haに及ぶ大規模再開発が進行中の「TOKYO TORCH」。大手町と丸の内、八重洲、日本橋の結節点となり、オフィスで働く人や、観光で訪れる人など、多彩な人々を迎え入れるための空間づくりが進められています。2027年度の街区全体開業に向けて、まずは約8,000人が働く大規模複合ビル「常盤橋タワー」が竣工いたしました。



Mitsubishi Jisho Sekkei Inc. 提供



環状七号線 地下広域調節池

東京都が整備を進めている環状七号線地下広域調節池(石神井川区間)は、環状七号線及び目白通りの地下30~40mに延長5.4kmのトンネル式地下調節池を構築し、すでに稼働している「神田川・環状七号線地下調節池」と「白子川地下調節池」を連結するものです。この調節池の整備により、総延長13.1km、総貯留量143万m³の国内最大の地下調節池が完成し、時間75ミリの降雨に対応した洪水を貯留するとともに、神田川、石神井川、白子川の各流域間で調節池の容量を相互に融通することにより、時間100ミリの局地的かつ短時間の集中豪雨にも効果を発揮する施設となります。



「環状七号線地下広域調節池」のイメージ
東京都建設局 提供

首都高速道路 日本橋区間地下化事業

都心部の渋滞解消のため、1964年の東京オリンピック前に建設が開始され、1963年の開通からすでに半世紀以上が経過した日本橋川上空の首都高速道路。この区間は、構造物の損傷が激しく更新が必要となっています。都心部の交通を支える首都高速道路を、次世代へつなぐ、安全・安心な道にするため、地下化事業とあわせて、構造物の更新を図ります。また日本橋川周辺は、国家戦略特区の都市再生プロジェクトに位置付けられ、多くの再開発計画が立ち上がり、新しいまちづくりが始まろうとしています。これらのまちづくりと一体となって地下化事業に取り組み、地域の魅力のさらなる向上に貢献します。それにより、日本橋川周辺の景観や環境の改善が図られ、新しい日本橋の「まち」へ生まれ変わります。

※記載の再開発の計画は現時点の情報に基づき作成したイメージです。



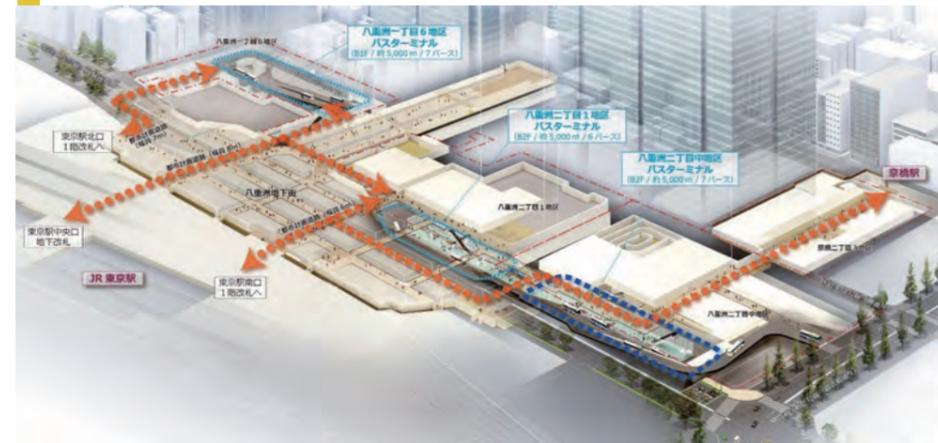
「撤去後の中央通り」のイメージ

「日本橋区間地下ルート」のイメージ
首都高速道路株式会社 提供

都市再生特別地区(八重洲3地区)

再開発が加速する東京駅東側エリアの新しい「核」であり、変わりつづける東京の新しい「起点」である八重洲。現在その八重洲では、敷地面積約12,390m²、地下4階地上45階、令和4年8月竣工予定の『八重洲二丁目北地区(A-I街区)』、敷地面積約10,600m²、地下4階地上51階に及ぶ令和7年度竣工予定の『東京駅前八重洲一丁目東B地区』、そして敷地面積約19,500m²、地下4階地上46階、令和10年度竣工予定の『八重洲二丁目中地区』の3地区の開発が進められています。事務所や店舗を中心にそれぞれホテルや医療施設、居住区などの用途を目的としており、特に「国際都市東京の玄関口」と「国内主要都市との交通結節」の機能強化をコンセプトにした『(仮称)八重洲バスターミナル』が注目されています。八重洲3区それぞれのバスターミナルを整備し、バス停の総数を28箇所、

専有床面積の総数は約21,000m²もの規模を目指しています。現在は「北地区市街地」では先行して整備が進んでおり、令和4年8月竣工の時期に合わせて北地区のバスターミナルも開業を予定しております。その後、令和7年度予定の東地区開業を経て、令和10年度予定の中地区開業によりバスターミナル全体開業となります。



「バスターミナル整備」のイメージ
独立行政法人都市再生機構 提供

チームワークが大切!

建設業、お仕事 関係図

建設現場の仕事は、社内外の多様なスタッフの
緊密な連携によって、はじめて成り立つもの。
それぞれの仕事はどう関わり合っているかを図解しよう。



キャリアパス

入社から5年後、10年後、そして20年後の自分は、どのように働いているのだろうか？どんな役割に就き、どんな役割を担っているだろうか？ここでは、誰もが気になる建設業界のキャリアパスモデルについて、10年ごとのスパンで紹介していこう。このページを参考にして、自身の将来像をしっかりと描き、それぞれの時代で求められる知識やノウハウを身につけられるよう、確かなステップを積み重ねてほしい。

現場主任 / 係長

さまざまな現場を経験し、必要な資格も得た30代になると、上司や先輩に動かされる立場から、多くの人を動かす立場になる。知識や技術だけでなく、周囲から信頼されるに足る人間性をも磨き、現場の責任者として大きく羽ばたいていく時期。

所長 / 部長

現場を見据えながらも、より高所からの経営的な視点・思考で、会社全体、さらには業界全体の課題に取り組んでいく時期。責任の大きさも、求められる力量も、それまでとは比較にならないが、培った経験や人脈を活かして取り組んでほしい。

工事長 / 課長

40代を迎える頃には、現場の舵取り役ではなく、組織のまとめ役としての力量が問われるようになる。個々の現場だけでなく、多くのプロジェクトをトータルに管理するための、より広い視野や高度なマネジメント力が求められる時期。

現場担当 / 新入社員

建設業界で「一人前」と認められるためには、幅広い知識と経験が求められる。このため多くの企業では、入社当初の5～10年間で、育成期間と捉え、できるだけ多様な現場で、多様な役割を担うようなジョブローテーションを設定している。

20代

30代

40代

50代～

やりがい・責任感・収入



Legacy

誰もが知っているあの建物が、いつ建てられ、どんな歴史をたどってきたかは、意外と知られていないもの。それだけ身近な存在であると同時に、長きにわたる歴史を重ねてきた証でもある。現在、建設中の多くの物件も、やがて街の一部として歴史を重ね、そのいくつかは形や役割を変えながらも、子や孫の世代へと受け継がれていこう。ここでは、東京を象徴する3つの物件について、その歴史を振り返ってみよう。



1949年頃

東京駅

1914年(大正3年)に完成した赤煉瓦の駅舎は、その堅牢さで関東大震災や戦時中の空襲も耐え抜いてきた。2003年には国の重要文化財にも指定され、その後の保存・復原工事を経て、現在も多くの人々に利用されている。



現在



現在

勝鬨橋

1940年(昭和15年)に完成した勝鬨橋は、大型船が航行する際には中央部から上部に開く「可動橋」として設計された。1970年を最後に開閉は停止されたが、今でも跳開時のダイナミックな姿を記憶する人は少なくない。



1965年頃



現在



1967年頃

東京タワー

1958年(昭和33年)の竣工当初から、総合電波塔という機能に加えて「日本のシンボル」として愛されてきた東京タワー。東京スカイツリー誕生後も、予備電波塔としての役割とともに、観光名所としての人気は健在。



建設業 就活応援サイト

みんなの建設業

就活ナビ

未来を築き、社会を支える

建設業の魅力や採用情報等、
様々なコンテンツを用意しています。是非ご覧ください。



<https://minken.ne.jp/>



まちこ

東京建設業協会
オリジナルキャラクター

一般社団法人

東京建設業協会

〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-5-1 東京建設会館5F
TEL:03-3552-5656(代表) FAX:03-3555-2170

<http://www.token.or.jp/>